

機能回復棟

（診る側だった救難医が、四人がかりで犯される）

体
験
版

目次

第一話

第二話

第三話

第一話

四月の山はまだ息が白い。送迎車の窓を杉林が流れていた。舗装が途切れると鉄の門が内側へ開いた。

機能回復棟。看板の文字だけが新しかった。三階建ての窓に細い格子がはまり、外来の案内板はどこにもない。迅は右肩を回した。関節の奥が鈍く鳴る。墜落から五か月になる。

ここで治すんじゃない。ここを出るんだ。

車を降りると消毒液のにおいが鼻を突いた。病院と同じにいいのはずなのに、足の裏が冷えていく。受付は無人に近く、事

務員が一人だけ書類の束を滑らせてきた。

「就労適性評価書です。ここに署名を」

差し出されたボールペンを取る前に、迅は条文を読んだ。救難の現場で判を押す前は必ず数字を確かめてきたから、読む癖がついている。

第七条。評価者が必要と認めた追加の工程を対象者は拒めない。

「追加の工程って、何だ」

「担当医から説明があります」

事務員は顔を上げなかった。紙の下段には金額が並んでいる。療養補償の振込元はこの施設で、退所した日から支給は止まると書いてあった。欄外にもう一行あり、父の入院先も同じ系列の病院だと記されている。

迅は指を止めた。サインひとつだ。ただのサインひとつのはずだった。ペンを握ると右肩がまた鳴った。

サインを終えると、事務員は控えを一枚だけ渡してよこした。原本は施設が持つという。迅の身体の値段も、父の点滴の残りも、この建物の中で決まる。廊下には人の気配がなく、自分の足音だけが白い壁に返ってきた。

診察室は白かった。白衣の男が一人、カルテを開いたまま顔も上げずに言う。

「迅さんですね。担当の医師です。座らなくて結構です」

声に温度がなかった。事務の声だ。迅は男の手を見た。爪が短く指に節があるのに、消毒の荒れがない。現場に出たことのない手だった。

「その手は洗ったのか」

男の指が一拍だけ止まった。

「これから触れる前に洗います」

顔を上げた男の目が、迅を上から下へ滑っていく。値踏みだった。患者を見る目ではなく、品物を見る目だ。

「墜落での右肩、右ひざの機能低下。復職には就労適性の評価が必要です」

「評価ならどこの病院でもできる」

「ここできしか出せない書類があります」

男は問診票に目を落とした。既往、服薬、睡眠、食事。事務の質問が続く。

「性交渉の頻度、最終の射精はいつですか」

「それも工程か」

「泌尿器と生殖機能も就労適性に含みます」

迅は答えなかった。男はその沈黙も一つの所見のように書き込んだ。それから胸元でペンを構える。

「機能評価から始めます。上を脱いでください」

「……検査か」

「工程です。次の工程に移ります」

規則、という顔だった。迅はシャツのボタンに指をかける。

現場で何百人も脱がせてきたし、人の服を切って心臓を診てき

た。脱ぐ側に回るのは初めてだった。

上半身をさらすと男はまず肩に触れた。可動域を測るゴニオメーターの金属が皮膚に冷たい。

「屈曲、百四十度。健側との差は二十度」

数字が読み上げられてタブレットに落ちると、ぴこん、と音が鳴った。男の指が鎖骨から胸へ下り、肋骨を一本ずつ、呼吸を数えるようになぞっていく。血圧計の帯が腕に巻かれ、しゅう、と締まった。

「血圧、百三十二の八十。呼吸数、正常。ここも脱いでください」

男の視線がベルトへ向いた。迅は動かなかった。心拍が上がっていくのがわかる。指が勝手に自分の手首へ伸びて、脈を数えた。速い。九十を超えている。

落ち着け。ただの検査だ。

「下も工程か」

「機能は全身で評価します。股関節の可動域が歩行に直結する」

正論だった。正しい手続きには逆らう言葉がない。迅はベルトを外して布を落とした。男は表情を変えず、ペンを一度だけ置いた。

傾斜台にあお向けにされると、両の足首にベルトが回った。かちり、と留め具が鳴る。手首も同じように留められ、腕の自

由が消えた。

「体表の感覚評価から入ります。異常がないか見ます」

男の指先が胸の中心を下りて、乳首をかすめた。迅の肩がわずかに動く。

「ここ、反応します。感覚は保たれていますね」

指が乳首の縁を円でなぞった。かたく尖っていくのが自分でもわかる。医学では末梢の感覚検査でしかないその動きが、迅の呼吸を浅くした。

「胸で反応する男は珍しくありません。記録します」

ぴこん、と音。乳首の感度が、数字にされていく。

「股関節、外転を測ります。力を抜いて」

ひざ裏を持ち上げられ、脚を左右へ開かれた。太もものつけ根が伸びて、ゴニオメーターの腕が内ももに当たる。

「外転、四十五度。可動域は正常です」

数字。また数字だ。男の指が内ももを滑り下りて、可動域という名のもとに会陰へ触れた。ためらいがまるでない。

「圧痛の有無を確認します」

指の腹が袋の裏を押すと、迅の腰が勝手にはねた。

「……っ」

「反応あり。神経の走行は正常ですね」

事務の声のままだった。だからこそ背筋が冷えていく。迅は自分の身体を臨床で読んでもしう質だった。今、海綿体に血が流れて陰茎が張り始めている。予測どおりだ。診る側だった頭が勝手にカルテを書く。勃起、確認。

やめろ。俺の身体。

「反応しています。正常な生理です」

「触るからだろう」

「触って確かめるのが評価です」

男は綿棒を取り、亀頭の各所へ順に当てていった。裏の筋、先端の割れ目、縁の張り出し。触れるたびに部位の名と反応の度合いを口にする。感度の地図を作られているのだと迅は気づいた。自分が最も弱い場所を、他人に測量されている。

「先端の反応が最も強い。ここを基準にします」

男は綿棒を捨て、今度は指の背で内ももの内側を下から撫で上げた。ふ、と陰囊がひとりでに持ち上がる。迅の意思ではない。ただの反射だ。挙睾筋反射という、名前まで知っている反射だった。

「反射、正常。ここも数字にしておきます」

自分の身体が勝手に動いて、それを他人に採点される。迅は歯を食いしばった。次に男は会陰の一点を指で押した。少しずつ

つ位置を変えながら、圧を加えていく。

「圧痛点、ここ。ここも。前立腺の投影部です」

押されるたびに下腹の奥がうずいた。触れられていない陰茎の先から、また透明な糸が垂れる。触っていない場所からの反応を、男は見逃さなかった。

「奥で反応していますね。今日は入れませんが、記録はします」

入れないという言葉が、いつか入れるという予告に聞こえた。迅の背に汗が伝う。

「あんた、これを検査だと言い張るのか」

「検査です。反応の再現性を確認します」

男が首から聴診器を外し、迅の胸に膜を当てた。金属の縁が尖った乳首をかすめて冷たい。心音を聞きながら、もう片方の手で陰茎の根元を包む。冷たい指がゆっくり先へ滑ると、皮膚がめくれて先端がさらされた。しゅ、と乾いた音がする。

「亀頭、発赤。心拍、九十八」

医学の言葉が一つずつ迅の身体を部品に変えていく。陰茎、亀頭、海綿体。日常では使わない単語を他人の口から事務的に貼りつけられることが、羞恥を煮詰めた。先端に透明な粘りがにじむ。じわりと一滴、糸を引いて男の指に絡んだ。

「先走り、あり。粘度、正常」

数値にされていく。自分の身体から出たものが数字に変わる。消毒液のにおいに汗のにおいが混じり始めたが、それは自

分の汗だった。

「あんたのそれは、ずいぶん綺麗な手だな。現場を知らない手で、よく人を評価できる」

迅は男を睨んだ。強がりだけは手放したくなかった。

「評価に現場は要りません。数値が要ります」

男は握りの強さと速さを変えながら、そのたびに数字を口にした。弱く握れば反応がにぶり、強く握れば先端の透明が増す。浅く先だけをこすれば腰が逃げ、根元まで包んで扱けば喉

が鳴った。角度をつけて裏の筋をなぞられたときの反応がいちばん大きいと、男は淡々と告げる。

「裏側、感度が高い。ここを重点にします」

自分の弱点が他人の台帳に整えられていく。品定めではなく測定だと言い張る手つきが、かえって迅の芯を削った。汗が背を伝って傾斜台のシートに溜まる。消毒液のにおいの奥で、自分の雄のにおいが濃くなっていくのがわかった。俺の身体が、この男の手を覚え始めている。それが何より許せなかった。

男は速さを変えなかった。しゅ、しゅ、と一定のリズムには感情がなく、だから逃げ場がない。先走りが潤みに変わって指の滑りが速くなり、ぐちゅ、と粘った音が白い部屋に落ちる。迅の腰が台の上で浮こうとするたび、ベルトが引き止めた。他人の手の中で雄の熱が育っていくのを、血が正直に認めている。下腹の奥に熱が集まって、行き場をなくして渦を巻いた。睾丸が引き上がる。臨床で何度も聞いた前兆を、自分の身体が起こしている。

「そろそろ達しそうですね。心拍で分かります」

男の手が止まった。射精の直前で、根元をきつく握って止める。せり上がっていた熱が行き場を失って、迅の腰が跳ねた。

「……っ、は」

「まだ記録の準備ができていません。少し待ってください」

寸止めだった。それも工程だと言わんばかりの顔で、男は空いた手で迅の手首を取る。脈を計る。診察の手つきで、迅がさ

つき自分でやったのと同じ位置に指を当てて。追い上げられて、直前で止められて、脈だけを数えられる。

「く、そ……」

「悪態は記録しません。数値だけ記録します」

止められた分だけ、次に触れられたときの感度が跳ね上がった。男が握りをゆるめて、また先端へ滑らせる。焦らされた身体は一撫でで限界へ戻っていく。せり上がって、また根元で止

められた。二度目の寸止めだ。今度は先端の割れ目を親指で押さえられ、行き場のない熱が身体の中で暴れた。

白い部屋に、迅の荒い息と、粘った水音だけが残る。消毒液と汗と、自分の先走りのにおいが混ざって鼻につく。手技の音が変わるたび、身体がそれを追ってしまう。しゅこ、と鳴れば腰が動き、止まれば奥がうずいた。もう何度目かわからない波が引いては戻り、そのたびに男は脈を確かめて、数字をひとつ書き足す。

「まだ達しないでください。閾値を測っています」

男は限界の縁を測っていた。あと少しで越える、その一点で手を止め、脈を数え、また戻す。迅の身体は男の指の下で、越えたいのに越えさせてもらえない一線を、何度も往復させられた。頭の芯が白く濁っていく。診る側の理性が、いつのまにか働かなくなっていた。

「あ、あ……っ、いいから、出させろ」

「自分から求めるんですね。記録に値します」

迅は言葉を失った。言わされた。強気の口が、出させろと言った。男の目がわずかに満ちる。それが患者を見る目でないことだけは、はっきりとわかった。

「では、確認します」

男が握りを再開した。焦らされ抜いた陰茎は、三度こすられただけで限界を越える。睾丸がきつく上がり、下腹の底から熱が押し上がった。

「出る、離せ、離せって」

「どうぞ。射精反応を確認します」

男が先端を締めた瞬間、迅の視界が白く飛んだ。どぶ、と熱が噴いて腹の上に落ちる。一度、二度、脈打ったびに吐き出される。飛んだ精液が胸まで届き、三度目は勢いが弱く、とろりと男の指を伝った。腰が痙攣して止まらない。足首を縛られた台の上で身体が跳ねるあいだ、男は最後まで手を止めず、絞出す角度を正確に知っていた。

「射精、確認。初速、飛距離ともに良好。量、性状は記録範囲内」

タブレットに指が伸びる。一拍、置いてから。

「記録します」

ぴこん、と音が鳴った。迅の精液の量が、粘度が、飛距離が、射精した時刻が、数字になって残る。息が荒く、ほおが熱かった。迅は天井を見た。勝つつもりで来て、制度に身体で応

じてしまった。診る側の男が診られる側で果てた事実だけが、白い部屋に残っている。

男は脱脂綿で先端をぬぐい、光にかざした。糸を引く白を、標本でも見るように確かめる。

「回復は良好です。ここまでの数値は、すべて基準内に収まっています」

褒められているわけではなかった。想定どおりだと言われているだけだ。想定の中にあることが、迅にはいちばん堪えた。

抗ったつもりの反応まで、この男の予定表にはじめから書き込まれていた。

「一度で終わりだと思わないでください」

男は新しい手袋をはめ直した。指がまだ濡れている先端に戻ってくる。達したばかりのそこは触れられただけで腰が逃げた。

「や、待て、今は無理だ」

「不応期の長さも評価項目です」

男の指が先端の割れ目をなぞると、びく、と全身が撥ねた。

出したばかりの身体に二度目の熱が無理やり灯される。過敏で、痛いほど気持ちがいい。診る側の頭が実況をやめない。反応、亢進。閾値、低下。

「あ、く……っ、やめ」

「反応、良好ですね。再現性あり」

男は過敏になった先端を、今度はてのひら全体で包んで転がした。強い刺激ではないのに、達したばかりの神経がそれを何

倍にも拾う。迅の腰がベルトの中で暴れ、足の指が丸まった。痛いのか気持ちがいいのか、境目が溶けている。頭の隅では所見がまだ流れていた。不応期、短縮。反応、閾値以下でも誘発。だが、その所見を書いている理性そのものが、熱でばやけていた。

また脈を取られた。九十が百を越えていく。数えられて、逃がしてもらえない。迅の目の縁が濡れた。悔しさなのか生理なのか、自分でも切り分けられない。二度目の熱は一度目より深

い場所から来て、声を殺しきれずに喉の奥が鳴った。男はその声も記録する目で聞いている。

波が引かないうちに、男は下腹をてのひらで軽く押した。まだ張っている奥を確かめる手つきだった。

「明日以降、反応の閾値はもっと下がります。身体が今日を覚えるからです」

覚えるな、と念じても遅い。迅の身体は、他人の手の速さと角度を、もう一度分だけ記憶していた。診る側の眼で自分を見

張ろうとしても、その眼まで熱に溶かされかけている。

「次の工程では、電気での評価に入ります。今日はここまで」

男は電極のついたパッドを一度だけ迅の視界に見せて、また箱へ戻した。予告だけが白い部屋に残される。

服を戻すころ扉が開いた。年かさの看護師が清拭の道具を押してくる。手袋をはめて、ぱちん、と鳴らした。

「失礼しますね。あとは私が」

迅の腕を取ろうとして、その手が止まった。看護師の目が迅の手首に落ちている。脈を計るときの、迅の指の位置に。何かを見たような間があった。

「……いえ。何でも」

看護師はそれ以上言わず、迅の手首を拭き始めた。拭く手つきは医者よりも慣れている。長く誰かの世話をしてきた手だった。脈のあたりを一度だけ指の腹で確かめ、それきり何も言わない。なぜ止まったのか、迅は聞かなかった。聞ける空気では

なかった。窓の外で杉が揺れている。門は、内側にしか開かない。

第二話

朝の光が格子で四つに割れて、床に伸びていた。

迅は支給された部屋のベッドに座っていた。三畳。作りつけの机と、木の椅子が一つ。窓は開かず、廊下側の扉にも内から鍵はかからない。

右肩を回すと、関節の奥が鈍く鳴った。右ひざも同じだ。傾斜台で二度搾り取られた身体は、一晩たっても、他人の手の速さと角度を、律儀に覚えている。指の腹の温度まで、皮膚のどこかに残っていた。

覚えるな。ただの反射だ。

迅は右の手のひらを、開いて、閉じた。身体は機械だ。刺激が入れば、決まった反応が返る。そこに意味を足すから、羞恥になる。足さなければいい。感情を切り離して、あの男の手を、数字を取るためだけの道具だと思えば、耐えられる。最短で評価を出させて、ここを出る。父の呼吸器が止められる前に。

枕元に、朝食のトレイが手つかずで残っていた。上着の内側では、控えの一枚が折れている。迅の身体の値段と、父の点滴の残量が、同じ建物の、同じ帳簿に並んでいた。

昨日の数値を、迅は覚えていた。射精、二回。不応期、短縮。すべて基準内。基準内という言葉が、いちばん応えた。抗ったつもりの反応まで、あの男の予定の中にあつた。今日は、そうさせない。感情を殺して、機械のように受け流す。それだけだ。

廊下を、足音が近づいてくる。扉の前で止まった。迎える時刻だ。

評価室は、前の日の診察室より広がった。窓のない部屋だ。中央に台が一つ。壁際に金属のワゴンが寄せてある。天井の照明は白く、人の影が薄い。消毒液のおいが、前の日より濃かった。

男は白衣で、ワゴンの上の機器を確かめていた。黒い箱から、細いコードが何本も伸びている。端に、四角い粘着パッドがついていた。

「今日は低周波での評価です。神経の伝導速度と、反射の閾値を測ります。前日の基準値と照合します」

顔も上げずに、男が言う。声に温度がない。前の日と同じ、事務の声だ。

「あんだ、電気で何を測る気だ」

「随意運動と、不随意反応の切り分けです。あなたの意思で動かせる部分と、意思と関係なく動く部分を、数値で分けます」

正しい説明だった。低周波での神経筋評価は、迅も現場の外で見たことがある。手続きとしては医学的に正しく、正しいものに俺は逆らえない。それが自分の弱点だと、迅は知っていた。診てきた側だから、正しい手続きの前で口を閉じる癖が、身体に染みついている。逃げるための言葉が、喉の途中でいつも溶けてしまう。

男は、一度に全部を奪う気がないらしかった。工程を一つずつ刻んで、迅の身体から「自分で決める」という一点を、少しずつ削り取っていく。そういうやり方に見えた。最短で終わらせて出ていきたい迅とは、目的が正面からぶつかっている。向こうは、終わらせる気がない。

「台へ。前の日と同じように」

迅は上を脱ぎ、下も脱いだ。二度目だからか指がためらわず、それが自分でも気に食わなかった。あお向けになると、足

首と手首にベルトが回る。かちり、かちり、と留め具が四つ、順に鳴った。腕と脚の自由が消えていく。

男は薄い手袋をはめ、パッドの裏の透明なゼリーを、指で薄く伸ばした。冷たそうな艶が、白い照明を照り返す。ワゴンの金属が、迅の視界の端で光っていた。

ゼリーのにおいが、鼻に届いた。ゴムと、消毒液のにおい。その奥に、金属じみたものがかすかに混じっている。

モニターの音が、まっすぐな一本の線になる。手のひらの下で、肋骨がもう跳ね返してこない。雨と燃料のにおいの中で、握った手首に、脈がなかった。指の腹が、ないものを探して滑る。

迅は目を開けた。天井の白が戻ってくる。古い現場だ。もう終わったことだ。誰だったかを思い出す前に、迅はそれを、奥へ押し込んだ。押し込めるうちは、まだ動ける。

男はパッドの一枚を、迅の会陰にあてた。ぺた、と皮膚が吸いつく。ゼリーが冷たくて、太ももの内側がひとりでに引きつった。消毒液のにおいに、ゴムの匂いが重なる。

「一枚目、会陰部。神経の走行に沿わせます」

男の指がパッドの縁を押さえ、位置を細かく直す。触診の手つきだった。迅は奥歯をかんだ。冷たいだけだ。まだ何も始まっていない。ただの電極だと、頭の中で唱えた。

二枚目を、下腹の恥骨のすぐ上へ。三枚目を、会陰のもう少し後ろへ。前立腺の投影部を挟むように、男はパッドを置いていく。ぴた、ぴた、と乾いた音が続いた。指先が皮膚を押すたび、位置がわずかにずれて、直される。

「前立腺投影部を挟みます。ここの反応を数値化します」
位置は正確だった。解剖を知っている手だ。まだ触れられてもいない一点を、他人が身体の地図の上から狙っている。迅の背中が冷えた。

男が黒い箱の目盛りに触れた。かちり、と小さな音がする。

「出力、最小から。合図はしません」

「合図くらい——」

言い終わる前に、会陰の奥がぴくりと動いた。電気が入ったのだ。深いところの筋肉が勝手に一度、縮んでゆるむ。迅の意思はそこに一切かんでいない。不随意。臨床の言葉が浮かんで、すぐに、それが自分の身体のことだと気づいた。

男が目盛りを一つ上げた。びりびり、と会陰の奥に細かい波が生まれる。波は一定の間隔で来て、そのたびに迅の肛門の括約筋が締まってはゆるむ。自分では止められない。びりびりが皮膚の下で散って、内ももの神経までしびれさせた。

「収縮、規則的。随意の指示なしで起きています」

男はタブレットに数字を落とした。ぴこん、と音が鳴る。迅は下腹に力を入れて、波にあらがおうとした。力みは、何の役にも立たなかった。電気は、迅の意思の外側から入ってくる。

男が波の形を変えた。速い波と遅い波が、交互に会陰を打つ。速いときは表面がぴりつき、遅いときは奥の方が重く引きつる。迅の身体は、その二つを取り違えもせず勝手に応えた。

「周波数を切り替えます。反応の質が変わりますね」

診る側の頭が、二種類の刺激を臨床用語で仕分けようとする。表在性、深部性。だが仕分けたところで、どちらも止められない。ただ、来る刺激を正確に味わわさっているだけだった。

波が前立腺の投影部に届くころ、触れられていない陰茎の芯に、熱がにじみ始めた。迅は自分の下半身を見た。海綿体に、血が流れ込んでいく。誰の手も添えられていないのに、雄が、ひとりでに頭をもたげはじめる。

「勃起、誘発。接触刺激なしで確認」

男の声は変わらない。迅の喉が鳴った。指一本触れられてもいないのに、張っていく。診てきた側の目が、症状名を並べていく。刺激源、電気のみ。随意性、なし。

男が箱の設定を変えた。波の間隔が短くなる。びく、びく、と会陰がひきつり、そのたびに、迅の腰が台の上で小さくせり上がった。手首のベルトがそれを引き止め、汗が背を伝ってシートに落ちた。

「これも工程か」

「不随意運動の振幅を測っています。あなたが動かしているのではない。電気が動かしている」

その通りだから、言い返せない。腰が浮くのは反射で、迅の意思ではない。意思ではないのに勝手に動く身体を、他人にのぞき込まれている。

男が下腹のパッドの出力を上げた。太ももの内側の筋肉が勝手に固くなる。開かされたひざが、その姿勢のまま小刻みに震えた。迅はそれを止めようと力を入れたが、力を入れた筋肉ほど、電気によく反応した。

「内ももの筋、反応。力を抜いても、入れても、同じように出ますね」

抗っても、明け渡しても、数字は変わらない。迅の身体は、どちらの命令も、電気の前では等しく無効だった。汗が、こめかみを伝って落ちる。

そそり立ったものの先から、透明なものがにじんだ。触れられていない先端が、電気の波だけで潤んでいく。じわり、と一

滴が浮いて、糸を引かずに、先で光った。消毒液のにおいに、別の匂いが混じりはじめる。

「先走り、あり。接触刺激なし。分泌も不随意ということです」

ぴこん、と数字が増えた。迅は下腹を見た。自分の身体が、勝手に濡れている。感情を殺しても、この反応は一ミリも止まらない。殺す殺さないの問題では、そもそもなかった。

男が、つまみを回して、会陰の後ろのパッドの出力だけを上げた。かちり、と音がする。肛門の括約筋が、電気の間隔に合わせて、締まる、ゆるむ、を繰り返した。迅の意思は、そこにも届かない。奥が、勝手に開かされては、閉じられる。

「括約筋、規則的に収縮。ここも随意の関与は、見られませんか」

自分の身体の、いちばん内側まで、他人の機械が、開け閉めしている。迅は、それを止める言葉も、力も、持っていなかった

た。

電気の波が強くなると、袋が、ひとりでに持ち上がった。拳
鞴筋反射。名前まで知っている反射が、電気で無理やり引き出
される。奥で鞴丸が引き上がる感覚を、迅は他人に測られてい
る。

「拳鞴筋反射、亢進。前の日より閾値が下がっています」

前の日より、下がっている。手技で覚えさせられた身体が、
たった一晚で、電気に対しても閾値を明け渡していた。その所

見を、認めたくないのに認めてしまう。順応、早い。

迅は呼吸を整えた。感情を切り離せば、これは、ただの筋反応だ。心拍を落とす。目を閉じる。頭を、臨床に置く。だが電気は、頭の外から入ってきた。意思を静めても、会陰の波は、同じ強さで括約筋を締める。むしろ、力んでいないぶん、反応が、はつきりと数字に出た。

「弛緩しましたね。そのほうが、よく反応が出ます。記録に向いています」

迅は目を開けた。抵抗をやめれば楽になるどころか、より正確な検体になるだけだった。逃げ場が、この工程には、初めから設計されていない。

男は、パッドの一枚を、陰茎の裏側の付け根へ貼り直した。

前日、いちばん感度が高いと記録された場所だ。ぺた、と皮膚が吸いつく。そこへ電気が入ると、迅の腰が、今までとは違う跳ね方をした。

「昨日の基準点です。ここの再現性を見ます」

覚えられている。自分の弱い場所を、他人の台帳が正確に狙ってくる。逃げ場を探す目が、どこにも見つけられない。裏筋、閾値、最低。

男が目盛りを、もう一つ上げた。びくん、と腰全体が跳ねる。会陰の奥から前立腺の投影部まで、電気が、一本の線でつながった。先端の透明が量を増して、今度は糸を引いて、下腹へ垂れる。

「あ……っ」

「反応、増大。閾値、低下。声が出ましたね」

声が漏れた。殺しきれなかった。迅は唇をかんだ。かすかに、血の味がする。電気の波が引くたび、下腹の奥が、うずいた。次の波を、待っている。待つな。俺の身体。

迅は、手首と足首に力を込めて、ベルトを引いた。革が、みしりと鳴る。腕の筋も、肩の古傷も、力の限り締め具を押した。だが、留め具はびくともしない。抗いは、汗になって背を流れるだけだった。

「無駄な力みです。締め具の分だけ、心拍が上がります」

男の言う通りだった。あらがえばあらがうほど、数字が動く。動いた数字は、また記録される。迅は、あらがうことでさえ、この男の観察の一部にされていた。

波が速くなり、下腹の底に、熱がたまっていく。射精の前兆だ。拳拏筋が締めまり、袋がさらに上がる。臨床で何度も観測してきた順序を、自分の身体が、電気だけでたどっていた。あと少しで、越える。その一点で、男が目盛りを一段、戻した。

「達しそうですね。まだです」

せり上がった熱が、行き場をなくして、下腹で暴れた。迅の腰が、ベルトの中でよじれる。手技もない。指一本触れられないのに、達する寸前まで運ばれて、そこで、置き去りにされた。

男が、空いた手で迅の手首を取った。前の日と同じ位置に、指を当てて、脈を数える。会陰には、まだ電気の余韻が、びりびりと走っていた。

「百八。上がっています。呼吸を整えてください」

整うわけがない。さつき奥に見た、脈のない手首。今、他人に数えられている、脈のありすぎる自分の手首。二つが頭の中で重なって、迅は奥歯をかんだ。生きている側の脈だけが、律儀に数を刻んでいる。

脈が落ちきる前に、男は目盛りを戻して、さらに一つ上げた。びりびりが、じりじりに変わる。会陰の奥で電気が渦を巻

き、前立腺の投影部を、内側から叩いた。触れられていない奥が、脈打つように収縮する。

「奥、反応。前立腺の不随意収縮を確認」

下腹の底が、迅の意思と関係なく波打った。腹の中に、自分ではない何かが入り込んで、勝手に動いている。ペニスはどう、痛いほど張りつめていた。

男が、じりじりの波を、深いほうへ集めた。前立腺の投影部だけが、内側から連続で押される。奥で、覚えのない快感が、鈍

く膨らんだ。先端からまた透明が押し出されて、迅ののどから、押し殺しきれない低い音が漏れる。

「深部の反応、持続。あなたが今出している声も、随意ではありませんね」

声まで、反射だと言われた。奥を押されるたびに、腹の底で、何かがほどけていく。診る側の頭が、その感覚に名前をつけられずにいた。これは、痛みではない。痛みではない。

先端から、透明が伝い落ちて、下腹にたまった。糸が幾筋も引いて、電気の波に合わせて、揺れる。迅の口から、こらえきれない息が漏れた。感情を殺す。もう何度目かわからない念仏が、まったく効かない。殺しても、殺さなくても、身体は同じだけ濡れて、同じだけ反応する。

「あ、く……っ」

「随意性の欠如を、確認しています。あなたの気持ちは、この記録には要りません」

迅は言い返せなかった。のどの奥が詰まって、声にならない。感情を殺せば耐えられると、思っていた。だが、この評価は、殺すべき感情の在りかを、そもそも見てすらいなかった。

波が、また最高点へ迅を押し上げた。今度こそ止められない。そう思った瞬間、男が目盛りを落とした。二度目の寸止めだった。電気が引いて、達しかけた身体が、宙づりにされる。

「まだです。閾値の再現性を見ます」

迅の腰がベルトの中で跳ねて、行き場のない熱が、全身を駆けた。指一本触れられず、機械の目盛り一つで、達する権利まで、他人に握られている。悔しさで、目の縁が熱くなった。それでも怒張はゆるまず、先端は濡れ続けている。

三度目に目盛りが上がったとき、迅はもう、あらがう言葉を持っていなかった。電気の波が間隔を詰め、会陰から前立腺の投影部までを一続きに責める。びくん、びくん、と腰が跳ね続けた。下腹の底で、二度止められた熱が、限界の壁を内側から

押し破ろうとする。汗と先走りの匂いが、消毒液の奥でにじんだ。

「出力、保持します。このまま反応を取ります」

止めるための手は、今度は、来なかった。逃がされない。迅の背が台から浮いて、足の指が、きつく丸まった。

電気の波が一つ、いちばん深いところを貫いた。迅の視界から音が引いていく。時間の刻みが、そこだけ抜け落ちる。声も、出せなかった。射精は、噴くのではなく、押し出された。

手技のときの勢いは、どこにもない。とぷ、とぷ、と先端から白が盛り上がっては、糸を引いて、下腹へ流れ落ちる。脈打つ間隔が、電気の波とそろっていた。

「無接触で射精。随意の関与、なし」

自分が達する、その間隔まで、機械が決めている。迅の頭の芯から、力が、ずっと抜けていった。

電気が切れた。会陰のパッドが、まだ皮膚に吸いついてい
る。迅は台の上で、息をした。腹の上に、自分の白が、糸を引

いてたまっている。手技のときより、量は少なく、勢いもなかった。それでも、たしかに出させられた。触れられずに。感情を、殺したうえで。

男はタブレットに指を伸ばし、一拍、置いた。

「随意性の欠如を確認しました。あなたの意思は、身体の反応に届いていません。記録します」

ぴこん、と音が鳴った。迅は天井の白を見た。感情を殺せば耐えられると、昨日まで思っていた。だが電気は、感情のある

なしを、一度も問わなかった。殺すべき感情など、この評価には、初めから要らない。迅が守ろうとしていたものは、はじめから、評価の対象ですらなかった。

腹の上の白は、まだ温かった。それが冷えていくのを、迅は、ただ見ていた。拭く手も、隠す手も、ベルトの下で封じられている。自分の身体から出たものが、自分の意思と関係なく、そこにあった。手技のときとは、違う敗け方だった。あの

ときは、まだ抗った先で果てた。今日は、抗う前に、機械が勝手に決めた。

男はパッドを、一枚ずつはがしていった。ぱりっ、と皮膚が、乾いた音を立てる。電気は、もう切れている。それでも会陰の奥が、もう一度、ひとりでに締まった。迅の意思は、どこにもかんでいない。切れたはずの波の間隔を、身体だけが、まだ律儀に数えていた。

台の上に、
迅の言うことをもう聞かない身体が、一つ、残さ
れていた。

第三話

夜が明けても身体は静かにならなかった。

迅は部屋の床で右のひざを伸ばしていた。関節の奥が古い金具のような音を立てる。墜落の傷だ。だが今朝いちばんうずくのはそこではなかった。前日に電気で開かされた会陰の奥が、切れたはずの波の間隔をまだ数えている。時々ひとりでに締まった。

迅は床に拳を置いた。脈は計らなかった。

感情を殺せば耐えられる。前の日、その考えは崩れた。電気は、殺すべき感情の在りかを見てすらいなかった。ならば、殺す場所を変える。声だ。反応が止まらないなら、せめて声を止める。何も言わず、何も返さず、置物になる。数字だけくれてやって、その分だけ早くこの建物を出る。

上着の内側で控えの一枚が折れていた。迅の値段と父の点滴の残りが同じ帳簿に並んでいる。

廊下を足音が近づいてきた。前の日は一人分だった。今朝は二人分ある。

評価室の中央に見慣れない杵が増えていた。太いベルトと滑車のついた金属の腕。牽引の装置だと迅にはすぐわかった。整形の現場で何度も見ている。

白衣の男はタブレットを持って壁際に立っていた。前の日と同じ、温度のない立ち方だ。そのそばにもう一人いる。

紺の術衣を着た若い男だった。袖をまくった腕が太く、指が長い。迅を見ると、目もとをやわらげて軽く頭を下げてきた。

「はじめまして。今日から評価に加わります。迅さんの身体を、動く方から診る係です」

声が明るかった。白衣の男の事務の声とは違う。人に触れて生きてきた者の声だ。迅は肩の力をほんの少しだけ抜きかけた。

「あんたは、電気は使わないのか」

「使いませんよ。俺は、手が商売なんで」

術衣の男は両手を胸の前で擦り合わせた。乾いた音が二度して、てのひらが温まっていく。冷たい金属でも、冷えたゼリーでもない。人の手の温度だった。この男なら、まだ話を通じるかもしれない。迅はそう思いかけた。それが甘かったと知るの
は少しあとだ。

「担当の先生が綺麗な数字を残してくれたんでね。今日はもう少しほぐしましょう。可動域、まだ伸びしろがありますよ」

「牽引から入ります」白衣の男が言った。「股関節と骨盤帯の他動可動域を評価します。記録は私が」

二人がかりだ。一人が触れ、一人が数える。迅は口の内側をかんだ。逃げ場が、また一つ消えていく。

迅は上を脱ぎ下も脱いだ。三日目になる。指はもうためらわなかった。それが自分でも気に食わない。台におお向けになると術衣の男が足首と手首のベルトを留めていく。かちりかちり

と留め具が四つ鳴った。それから太いベルトが両の太もものつけ根に回される。滑車の枠につながっていた。

「これで骨盤を固定して、脚だけ動かしますね。痛かったら言ってくださいね」

男が右のひざを持ち、胸の方へ倒した。股関節が深く曲がり、太もものつけ根が伸びる。牽引のベルトが、開いた脚を逃がさない。関節包の伸びる鈍い引きつりが走った。

「屈曲、いいですね。可動域、出てます。次は開きましょうか」

両のひざが左右へ倒された。会陰が天井へまっすぐ向く。前
の日に電気のパッドを貼られた場所が今は何にも隠されずにさ
らされていた。迅は奥歯をかんだ。声は出さない。それだけは
俺のものだ。

男は左のひざも同じように倒し、開いた脚をゆっくり揺すつ
た。股関節の奥で、詰まっていたものがほどけていく。ハムス

トリングの伸びる、正しい痛みだった。整形なら金を払ってでも受ける施術だ。手技として文句のつけようがない。文句がつけられないから次に来るものにも逆らえなくなる。

「はい、脱力できてますね。いい患者さんだ」

その一言が迅の背筋を逆に冷やした。

術衣の男の親指が内ももの奥へ食い込んだ。温めたてのひらがつけ根の筋をゆっくり押し開く。ぐ、と硬いところがほどけ

て迅の脚から勝手に力が抜けた。押す角度も深さも正しい。だからこそ逆らう言葉が出てこない。

「内転筋、張ってますね。ここ、ほぐしますよ」

男の指が内ももを何度も往復した。押すたび位置が少しずつ下がっていく。ひざからつけ根へ。つけ根からその奥へ。ゴムと薬品のにおいの中で迅は天井の白だけを見ていた。まだ可動域の評価の範囲だ。まだそのはずだった。

「太ももとお尻の境目、癒着してますね。ここ、はがしておきましようね」

男の指が、内ももの終わりから会陰の縁へ滑った。癒着をはがすという名前のもとに、指の腹が袋の裏の筋をなぞる。乾いた指ではない。温めた、なめらかな指だ。迅の腰がわずかに逃げた。

「あ、逃げないで。ここ、大事なところなんで」

指は逃がさなかった。会陰の一点を円を描いて押す。前の日に白衣の男が前立腺の投影部と呼んだ場所だった。外から押されるたび下腹の奥が鈍くうずく。迅は声を殺した。息だけを鼻から細く逃がす。喉は鳴らさない。

術衣の男の手が止まった。迅の顔をのぞき込んでくる。汗のにおいと術衣の糊のにおいが近くなった。

「迅さん、我慢、上手ですね」

声の温度が少し上がった。さっきまで患者に向けていた明るさとどこか違う。迅は男の目を見なかった。見れば何かを読まれる。声を殺すことだけに意識を集めた。それがまずかったのかもしれない。迅が黙るほど男の指が丁寧になっていく。丁寧にしつこくなる。会陰をなぞる速さも押す強さも迅の反応を探って少しずつ変わった。

触れられていない陰茎の先に熱がにじんだ。会陰を押されているだけだ。握られてもいない。それでも雄がひとりでに頭を

もたげ始める。診てきた側の頭が、勝手に所見を並べた。海綿体、充血。刺激源、会陰の圧のみ。随意の関与、なし。

「お、反応してきましたね。素直だなあ」

男は嬉しそうだった。迅は唇をかんた。じわ、と血の味が広がる。声は出さない。だが下腹は男の手の下で正直に張っている。俺の意思を置き去りにして。

男がワゴンから小さな容器を取った。ふたを開けて指に透明なものをすくう。ゼリーだ。前の日にパッドの裏にあったのと

同じにおいがした。ゴムとその奥の金属じみたにおい。

「可動域評価、こっちも診ましようね。肛門の括約筋。ここも、立派な機能ですから」

「待て。そこは――」

「大丈夫ですよ。痛かったら、ちゃんと行ってくださいね」

言っても止めないことを迅は前の日に学んでいた。ゼリーを乗せた指が会陰の後ろへ、肛門の縁へぺたりと触れる。冷たい。太ももの内側がひとりでに引きつった。

男は指を沈める前に、もう一度てのひらを重ねた。ぬるついた指を乾いた手で温める。これから触れるものへの丁寧な支度に見えた。丁寧さがいちばんたちが悪い。乱暴にやられる方がまだ身構えられた。

男の指が、肛門の縁をゆっくり円でなぞった。ゼリーの冷たさに、そこがひとりでに閉じようとする。外肛門括約筋。迅の頭が勝手に名前をつけた。随意筋だ。俺の意思で閉じられる。閉じろ。迅は下腹に力を込めた。

「あゝ、力入っちゃうと痛いだけですよ。抜いてください
ね」

男は閉じた縁を指の腹で押した。押してはゆるめる。締めた
分だけ次にゆるむ。迅の意思とは裏腹に括約筋が少しずつ相手
の指に慣らされていた。

ゼリーを足した指が縁の中心にそっと圧を加えた。ぬ、と先
が沈む。外の括約筋が抵抗して押し返す。だが男は迅の呼吸を

読んでいた。息を吐いた一瞬に指の先が第一関節まで内へ滑り込む。ぬぷ、と濡れた音がした。

「はい、入りましたね。上手ですよ、迅さん」

迅の背中がこわばった。他人の指が、自分のいちばん奥にある。声はまだ殺している。だが、身体の芯はそれを許していない。内肛門括約筋。不随意筋だ。俺の意思では、締めることもゆるめることもできない。名前まで知っている筋肉が、他人の指を勝手にくわえ込んでいた。

男は入れた指を内でゆっくり回した。時計の針をたどるように壁を一周する。それから指を軽く曲げて縁を内から広げた。

「括約筋の可動域、診ますね。ここも関節と同じで、動く範囲があるんですよ」

迅の縁が指の形に押し広げられる。開く角度を他人が内から測っている。ひざや肩の可動域と同じ台帳の上でだ。屈辱の質が前の日とは違った。関節なら外から測る。ここは中に入られて測られる。

白衣の男がタブレットに数字を落とした。

「肛門括約筋、他動での伸展、良好。狭窄なし。基準内です」

ぴこん、と音。迅の内の広がり角度になって残る。歩行のための股関節の角度と同じ書式で並べられていく。

「あんた、これのどこが可動域評価だ」

迅は声を絞り出した。強がりだけは手放したくない。

「立派な評価ですよ。動く範囲を測る。それだけです」

男の声は明るいまま少しも揺らがない。悪意もためらいもその明るさの下にうまく隠されている。だからこそたちが悪かった。

指がゆっくり奥へ進んだ。直腸の壁を内から確かめるようにまわる。ゼリーの滑りで抵抗が少しずつ減っていく。ぬる、と粘った音が白い部屋に落ちた。迅は目を閉じて奥歯をかんだ。声を殺せ。ここで鳴いたらこの男はもっと深く来る。

男の指の腹が腹側の壁を軽く押した。その瞬間に迅の陰茎がびくりと跳ねる。触れてもいないのに。

「お、ここですね。前立腺」

男の指が、腹側の一点を内から押した。前の日まで、外からしか触れられなかった場所だ。今は壁一枚を隔てて、直に押されている。下腹の奥で、覚えのない圧が鈍く広がった。迅の腰が台の上で浮こうとして、ベルトに止められる。留め具がみしりと鳴った。

「あ……っ」

声が漏れた。殺しきれなかった。

迅は自分の下腹を見おろした。指一本ぶんの深さで他人が前立腺に届いている。会陰の外から押されるのとは圧のかかる向きが違う。裏から直に芯を押される。診る側の頭が所見を書く。前立腺、直接触知。反応、亢進。書いたところでその頭ごと熱に浸かっていく。

男は押し方を二通りに使い分けた。ひとつはこりつと点で押す。ひとつは腹全体で面から圧す。点で押されると下腹の芯が鋭くしびれた。面で圧されると腰全体が重く溶けた。迅の身体はその二つを別々に拾って勝手に応える。

「押し方で反応、変わりますね。おもしろいなあ」

おもしろいと言われた。測定でも品定めでもない別の目で見られている。迅の背に汗が伝った。

頭を臨床に置け。これはただの直腸診だ。迅は何度もそう唱えた。だが直腸診で雄は張らない。先走りは垂れない。腰は浮かない。臨床の型にこの反応は収まらなかった。名前をつけられない快だけが奥で膨らんでいく。

快が奥で膨らむたび迅は声を殺した。喉の奥で音を潰す。だが殺すほどに男の指は熱を上げた。速さが増し圧が深くなる。殺した声の分だけ指がそれを掘り起こそうとしている。そう見

えた。迅は気づいた。黙るのは逆効果だ。この男は静かな身体ほど暴きたがる。

「迅さん、声、我慢しなくていいんですよ。反応、ちゃんと診たいんで」

迅は答えなかった。答えれば負ける。だが黙れば指が深くなる。どちらにも逃げ場がない。診る側の頭がそれを認めた。この状況は初めから逃げ場が消してある。

男は指を二本に増やした。ゼリーを足してぐぷと押し進める。二本の腹で前立腺の投影部を内から挟むように押した。奥で鈍い快が膨らんでいく。痛みではない。痛みではない。迅の頭はその感覚にまだ名前をつけられずにいた。

「二本、入りましたね。ずいぶん柔らかくなった。上手ですよ」

男の声がまた熱を持つ。褒める言葉と、手つきの容赦のなさ、かみ合っていない。柔らかい言葉ほど、指が深いところを

狙ってくる。

男は二本の指を内で軽く開いた。縁が二本ぶんの幅に伸ばされる。

「もう少し、開きますね。痛かったら言ってください」

可動域評価という名目のまま、開かせる幅がさっきより広い。迅は奥歯をかんで声を殺した。するとその指が、開く幅をまた一つ広げる。黙るほどに、試される角度が深くなった。優しい声のまま、手加減だけがどこかへ消えている。

二本の指は直腸の壁を区画ごとに確かめた。腹側、右、左と順に押しは反応を拾う。腹側の一点だけ迅の腰が大きく跳ねた。男はそこを覚える。前日に白衣の男が外から探し当てた点を今日は内から狙い撃つ。逃げ場のない一点を二人がかりで前と後ろから挟んでいた。

触れられていない先端から透明なものが押し出された。じわりと浮いた一滴が糸を引いて下腹のくぼみへ流れる。二滴目がそれを追った。触れられていないのに濡れ続ける。迅はその筋

の増えていくのを他人に数えられている。先走り、持続。分泌量、増加。診る側の実況は、まだ止まらない。止められない頭だけが、最後の理性だった。

白衣の男が壁際から一步近づいた。タブレットに目を落とし一拍置く。

「前立腺の内圧刺激で、接触なしの分泌を確認。あなたの意思とは、無関係ですね。記録します」

ぴこん、と音が鳴った。迅の内の反応がまた数字になって残される。前も後ろも迅から出るものはすべて他人の台帳に整えられていく。

白い部屋に迅の押し殺した息とゼリーの粘った音だけが落ちた。ぐち、と鳴るたび腰が逃げようとする。消毒液のにおいに迅自身の汗と雄のにおいが混じっていく。逃げ場をふさがれた身体が他人の指のリズムをもう追いつめていた。それがいちばん許せなかった。

男は押す間隔を少しずつ詰めた。こりこりと奥を叩かれるたび迅の腹の底がうねる。挙睾筋が締まり袋が引き上がった。臨床で覚えた射精の前兆を身体が後ろからの刺激だけでたどっていく。汗が背を伝ってシートににじんだ。

「お尻だけで、いけそうですね。すごいなあ、迅さん」

迅は目を閉じた。前を触られていない。手技もない。電気もない。他人の指が奥の一点を押しているだけで、下腹の底が限

界へ近づいていく。歯を食いしばっても、腰の震えは止まらなかった。

迅の喉から、こらえきれない低い音が漏れた。奥を押されるたびに息が乱れて、鼻から抜ける音が白い部屋に響く。その音まで男は聞いている。診る側の耳が、自分の声を他人事のように拾った。呼吸、乱れ。発声、抑制困難。所見を書く頭の声が、だんだん小さくなっていく。

拳拏筋が限界まで締まった。袋がぴたりと引き上がる。射精の直前の形だ。だが前を触られていない。手も電気もそこにはない。奥の一点を押されているだけ。診る側の頭がその矛盾を処理しきれずにいた。刺激は後ろ。反応は前。俺の身体のどこが命令を出している。

術衣の男が前立腺の投影部を一本の指で続けて押しつぶした。ぐ、ぐ、と奥が鳴る。迅の背が台から浮いた。声を殺そうとした喉がこらえきれずに低く鳴る。

「あ、あ……」

達したのは、嘔くのも押し出されるのでもなかった。奥からせり上がって、こぼれた。触れられていない先端が、とろりと白をあふれさせる。糸を引いて、幾筋も下腹へ流れ落ちた。勢いはない。手技のときの飛距離も、電気のときの脈打つ間隔も、そこにはない。ただ奥を押されて、あふれた。腰が指を締めつけて震える。奥で何かがほどけて、止まらなかった。

男が指をゆっくり抜いた。くぷ、と音がしてゆるんだ縁が閉じきれずにしばらく開いていた。迅の意思はそこに届かない。

前日に電気で開かされたそこは今日、他人の指の形を奥で覚えてた。

白衣の男が下腹の白を脱脂綿でぬぐう。光にかざして性状を確かめた。

「後方からの刺激で、射精に準じる反応。前方の手技より、量は少ない。回復は良好です」

褒め言葉ではなかった。想定どおりだと言われているだけだ。抗った先の果てでも機械に決められた果てでもない。今日は優しい顔をした手が迅の奥から勝手に引き出した。

迅は荒い息のまま二人の男を見た。数える男と触れる男。役割がきれいに分かれている。一人が悪役で一人が優しいわけではなかった。優しい顔をした方がいちばん深く入ってきた。話を通じるかもしれないと思った相手がいちばん境目を越える。誤解していた自分の甘さが後ろの奥でまだ脈を打っていた。

術衣の男は指のゼリーを脱脂綿で拭き取った。それからまた両のてのひらを胸の前で擦り合わせる。乾いた音が二度。これから次の仕事を始める手つきだった。

「今日は、ここまでにしときますね。迅さん、お疲れさまでした」

明るい声だけが白い部屋に残る。擦り合わされる手の乾いた音が、消えたあとも、迅の耳の奥でまだ鳴っていた。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。